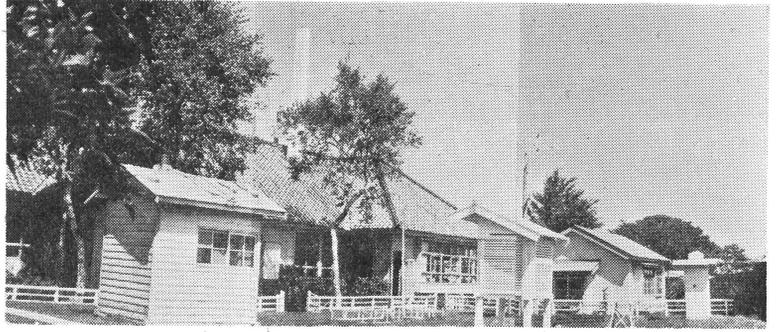


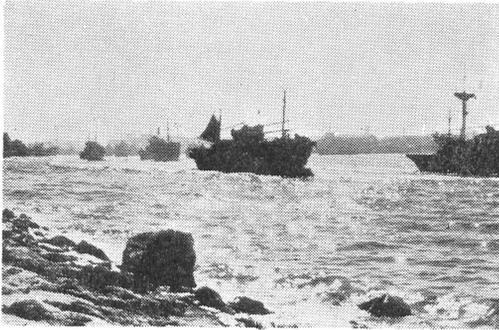
## 地方だより

### 八戸測候所



八戸測候所全景

「唄に夜明けた鳴の港」の民謡に広く歌われるここ「八戸」は青森県の南東部に位置し、おおよそ平たんであるが、南部の階上岳は緩やかに北東にのび太平洋に迫っている。また主たる水系として岩手県に源を発する馬淵川と新井田川の2流があり、これらは2,000haの水田地帯に灌水して市の穀倉をうるおしている。



いか船出港風景(当所前)

昭和4年市制施行当時5万人の人口が、今では19万人とふくれあがっている。

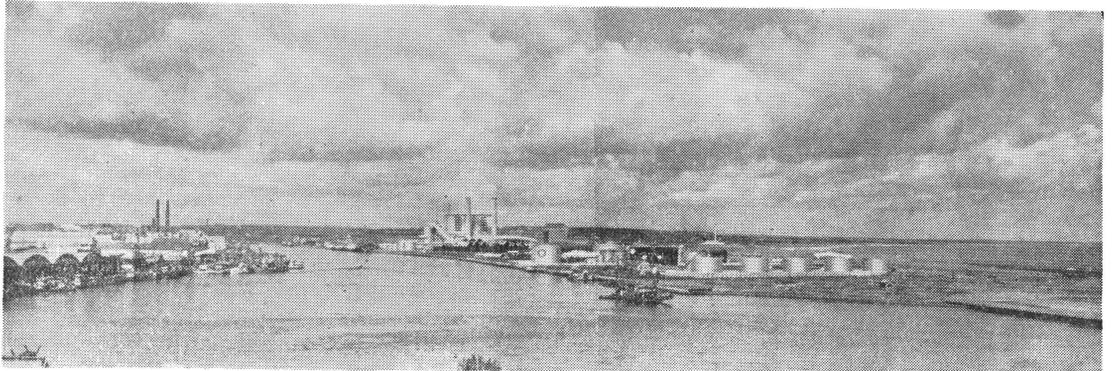
これは隣接町村の合併などもさることながら地域条件がこの増加を極度に促しているといつてよいであろう。もともと八戸の発展は港に初まり、現在の八戸港は藩政時代「鮫港」として江戸その他と交易し、三陸沿岸の要港として知られていた。今日では、水揚げ数量で全国第2位を占める有数の漁港として発展し、船籍も実に800余隻に及んでいる。ところが、イカ、サバ、サンマの大

衆魚が多いため、金額では50余億円にとどまっている。さらに港湾の整備や交通施設の充実に伴って、臨海工業が発展し、現在は東北地方の代表的工業都市としても急速な躍進を続けている。今後は市の北方海岸で第二臨海工業地帯の構想が具体化されつつあり、加えて今回新産業都市の指定によって明日への大きな発展が約束されるに至った。

この地にある八戸測候所は、東北本線尻内駅から八戸線にのりかえ、ムツ湊駅下車徒歩約10分で、八戸港一望におさめる海拔27メートル余の館鼻巖頭にある。

創立昭和11年、昭和8年の三陸地震津波および昭和9年の凶冷を契機に、これが克服のために設立されたものだ当所沿革にある。

この地方は梅雨から夏に偏東風(ヤマセ)で低温が持続し、顕著な年は凶冷を招くことがある。またこの期間霧の発生も多く、船舶の座礁・衝突といった海難事故も多くなる。冬には表日本特有の気候や積雪が少なく、好天に恵まれるが一年を通じて寒暑の差が大きい。また暴風日数の多いことなど特長としてあげられる。暴風日数はだいたい年間104日もある。昭和35年には、チリ地震津波で港湾や漁船が甚大な被害をうけた。このような状態で防災面では海難、凶冷、津波に私どもは主力を注いでいる。昭和29年から地元、漁業団体連合会と協力し、漁船に対し拡声機で当所から予警報、情報など1日2回(午前、午後)、また緊急の場合は臨時に、サービス放送している。津波対策については、昨年春ロボット検潮儀が設置され災害軽減に万全を期している。海難事故は本年に至ってここ10年間の1/2に激減してきたのに気をよくして喜んでいる次第である。(半沢義男)



工業地帯を望む(当所より)